



平家物語卷第十

須渡

内裏女房

請文

重衡之海道下

横笛

惟盛之出家

惟盛之入水

間惟盛之北方出家

重衡大路渡

八幡院宣

重衡之戒文

子方之出家

高野之卷

惟盛之然野信

間池之御衣用束下向

右渡

後さうちりきりてさうと花を待て候
結りさうい命とかりん志養と思ひます
兵の勅定の重きと故且又親の命誓いの
取と雷りんうおん申旨に相承りし
自今以後何の勇ましく相敵と平らありん
きて結りさうさうい法向くはとひ力せ
針と又後さう人きめえ定りさうい
の判友仲尔相章の上建北邊使大六条同衆
幼向來氏乃取大ゆと後さう系中此より下

此甲兵人等て皆神とも儒さうい
其縁と觸りし恩とさういし人
乃の中押さういさうい
此之位の中將唯國の傍に舟者五舟者六
大六代友と竹をよて西山の麓大覺寺に
あふてのむさうい我主の頭やまら由
とさうい見おれ人會中か結て又さうい其
乃の取いさういさうい大日比お孤をりし
一門の取いさういさういあまらりさうい

はまてしりありまむ山もたれ我ら
事とれ物るがら思ひ行ふここの痛
也如也舒くくくんと位はくはく
まるとその痛りりい物もれは痛き也
あていといりあうくして位あむり系
惜とりの神とまれ位の中は唯感と
獲皮の八活くけりうらぐらと秋の曉
中寝そくくくくくくくくくくく
丸うら親くくくくくくくくくくく

片ましくあむく寝覚えといきく
知成程かこり考れくくくくく人
片付も忘れ行り物とびくくくくく
あつ年くくくくくくくくくくく
字中付てくくくくくくくくくく
川くくくくくくくくくくくく
と空ひくくくくくくくくくくく
清くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく

小舟はほむいふと人新て海に咽り
とて昔清の長年流るる名も下へて出
るも多し小舟の区々あきつるも
公卿とて式を奉るとい何れも可申し
しりしと新へい小舟あり翁と角と
七つられおもひ新らんぞりやふもさ
新なるをいと美人いかにさ人々の
事ささるるは建くとも新ら思ひま
つそ世に世に思ひし事せん

そひくひんや也新かんといふも
これうまいたる昔清の也、新らるる
早も續く下社に秘あり八つ
小舟は也事と七つり之位乃中將
是れ人新へい小舟あり翁用恨は
しらるるはたまき人これ末細
とておもひと人新めそさ
思ひまらるる古の事
とや昔ゆまらるるけ新へい

幕

きし妻子の心と妻と抱きまゝに聞はせ
雲物あきらみしはくはて穢去と厭ふと
り舟の浄去と彩ふおかししに生くく
いほひなく妻のあはれにさす
南無文修羅の苦くくしと責らまは
しめめあつてえしり南傳の傳と七部
中よりあつてえしり南傳の傳と七部
えしりあつてえしり南傳の傳と七部
あつてえしり南傳の傳と七部

定あひしり

定衛天の後

日さ十字のよちと位り中將を衛賜と
大路と後せりつと肥れ次高実年本欄
地乃直垂く能威の遣えん日車志多り
室年うあはな島等百騎斗りて車
れ前後た右と打困せりて大桑と妻
海しきり車れ前後りあはれと妻
たたれおんと用きしりりそはの系中

乃下中と人等て穴系惜め人
幸しく入るや二位あり受の
と高家地ありる殿と人の中
ては流し不とをるは流し
内を向う痛しとよと皆並
とそ儒くさる河系中と海
成の作りとるま八条河
余のそ自れ和し今院の

乃使のそ人等は持る貞長
貞長と赤衣と紐笏帯と
中將は其の向く三位目
あり貞長と御衣も途と
宿やおろるるも志行る
佐々木前と新りも毛の
作神金寶鈕内約不ら種
と助とて治とては

中つたし秘の月方とす御とと也
六の曉と浪つととふとちきりして別
ありといふと今生と余のん事
いひまの事母とて必一佛淨土に縁
彩毛織へしととせんとそ美しくも
御の院室に御使系しく重後後後
八海人そ下なり

田裏女房

家又之位に侍り本上馬を政可し

中志あわ八條の女院と魚系とていづら
別ありと書うと八條布川乃御室系
て中より一と過は位乃中好の侍り重
馬を政可しと中よりいづら
中侍侍り御しと中より八條女院
と重系とのがそれいづら
そ系と書し秘の月方とす御とと也
誠厚ん之位の中好の侍り重
じしと中よりいづら

毎のさきさきち後乃由今大腰の刀とて
とくまらぬあまの事いふらん
いふとて腰刀と云肥乃波高し
之位中ねるの見あし入る
まの政可りて人々
あゝ越の行来此事
終りそのさきさき
しとて
とて

大腰の刀とて
毎のさきさき
とくまらぬ
いふとて
之位中ねる
まの政可り
あゝ越の行来
終りそのさき
しとて
とて

人ぞききりり実平初くそんを
もい女命の人の又とわかれり
うまそんをわたり政司者あり其
日一日と約言し終る入る院の
ホありそれ上の静しぬりと寝て件
の女命は信もくう高を恒の色とあ
とんてゆくまこと女命の位の中
の事事さひわらむ位もいぬ政司
人といまへに位の中わらの事と思

とさうきりとぬく思書とほし
和向しりぬそと答もいぬ位の中
お使の政司とせぬまぬいぬと
初くひて人針へ一首の房とそ
漢門のきみかたさうす身たり
今一とむれあふぬとそ
屋とて四世事ありて政司とあふ
條城門の山堂とありに位の中
らむて人針へ一首の房とそ

若くは我の心はなほあらずし

とこれ人々うらやましく清たらん

之位中ねはれを事と又新てそ思ふと新

ううと後之位中ねはれを事と向て空ひ

ありいらつを事思ふと新てそ思ふと

多々しく空ひのち後れを事と何れも

新と多々しく之位の中ねはれを事と

此より新と多々しく之位の中ねはれを事と

何れも多々しく之位の中ねはれを事と

位安とち事いしくそりある之位中將

不新位ひ新しく正時ゆは正空人の正時

いしを牛車法者ゆは法一院の

位安とち事いしくそりある之位中將

不新位ひ新しく正時ゆは正空人の正時

いしを牛車法者ゆは法一院の

位安とち事いしくそりある之位中將

不新位ひ新しく正時ゆは正空人の正時

いしを牛車法者ゆは法一院の

こゝろしりり切く世平ゆ割くを
まろり時世事流く又八条堀川の
ゆし系り三信の中將ありあす
又針へいそく一首此方をも書
まろりこれゆりときけい露の身
まろりとききし清ぬへきり
三信のまねい葛と足るいて日本
よりまき又ありつるえ聴ぬ思
あはれありし物くゆりしそ
まろり

てい中院のいふといふいつて
こゝろ申し一の枝と川へて
やほまそそ東山雙林寺此
まろりい中院といふいふい
のい娘た清の清のあし

八幡院宣

まろり院宣い神使回廿一日
下院宣并中院宣とす
人々集く院宣とす

其初云云 一仁者心帝小國之靈業
九別在祚中神金寶劍内侍取遙埋南
汝皇國之藝經教年夏且物家以火
事且以亡國之基也作彼重衡殆と云
依為东大寺破滅之逆后忽別親族
去七月之目於栲栲一若之諸一人被生
捕半築多思遙子望海
汝之彼地思友志忽通九字之記活
者名須敏棟物名仁令申長治一為

死罪神金寶劍内侍而三狩神黑 奉
也都者以彼重衡以可為寬宥者也
者院宣如斯仍執達如件

壽永三年二月十五日

大膳大夫成忠之兼

平大仙之敏人 被菴

結

三位乃中納言二位左衛門少輔

門と全領一人思召くは金も兼心
皇と都人なり新あり大皇御
命御人事不定やしく命連き
心行むしと申合まきうり二信力加及
世行きて入川が奇てそ信まきうり
しそくし信と行と継へきしと平大由之
可忠之形く信の状と書進く信
く信と行く都の上院の事と系
大膳を更しとあり成忠を信と信力て河

前とあり候進と其状と云
去十五の之院室回せり。河東後形
而め件但し信の事案事之意去七日
日於新列一古く渚通國郷以下高家
教案と録事平何とて存し全領一人寛
省と字や支我るに故より全院之第一之
清子お継帝之末子信行譲に左位既
四ヶ年治命を恙。東夷山狄猿猪雲入
洛之間且、幼龍母后之信元清と、朱

滅外宮之志依然不淺幸九列王於各
還幸者三種神器畢可收玉神宇支
志心臣為神長志若為心河愁之神
亦不收其愁上則臣不樂下先祖平將
軍貞國相馬將門進村打靡東八ヶ國心
來傳子孫人永奉守金銀物家之能中
大政大臣入在淨海寺保元平治兩度合
我將遇命自守勅命之來傳為主也
正不為子之作竹共清依頼物云平治元年

厚

十二月又委物が依頼叛頭可進村由治
卜放入在國慈悲之傳卜有可更何到臣
昔之昔思不為今者思忽魏派人者
相加之堂之列是思之思短下也忽拓
神今之天符沐期拜之鎮滅者名須切
婦之志救代之傳不淺上之正又淨海寺度
車之志不忘思之志一院乘禪川之可成
山筆志志家之志本院室之旨水之四圍
九國之軍兵也必之集也所靡也田野

予の書令の誓に取らる者不致と三種神
照引は至鬼界も備天竺震且死非我
相当仁王八十一代一痛我初代これ其
忽は之を夜沈み肩或進退必公啓
東内前也此法可死振法令奏聞
終人誠惶誠恐後一位前内大臣平
宗盛此首之上とて書進しつり

重衡之戒文

法皇はととい乃力也不致三位中将と鐘

倉下下少も室の事信中将位中
終てまのこをいりみ叶まりり物と
何と下ありんふ怒の人
又門の事毛極まそん
至重といふひなきと具ひけり
て後悔も久し毛甲斐そあきり
乃中将位肥の法言よりわあせ
あふかめりも久し富いりも
決る軍士中とてしと花行美院

ふ中と奏一ト人にかかみふ人こ院へ
奏一ト人こみりきいけい又鍾舎共
法一ト人せていりみふ人こ院へ
まてありりりりり河と信か大肥の法と名
て中家いゆりきと猛力及て目見見え
あり上人のありかつと法其才たやト
ふと魚かやと人こ室へ大肥は法と聖
各れり人黒衣はし法とと室いりり大
肥の法高やらえ其上人の才たやと実

平色法と信一ト人にかかみふ人こ院へ
ふ中と東のの法ト人送みりあま上人其
人あふいりき射白せんト八条堀門の
の室一ト人なりは信の中持やと法を射白
大行と法と信ととあつと室の子良と
て三信か信と射を室いりりりりりり
衛一ト人とのりりりりりりりりりりり
一人と神とせりりりりりりりりりりり
取と瞞い事思へ歎る中は信は其故と

高野の人の心身は業とて宗家より上人
小生も亦いふ自ら然るの事あり業は
よく重衡う後生といふ所より行りて
いふ可い物に任る身と至母路とあり
今生れ業をたれ務めて高野は昇院と僧
存せず况や軍書盡世に悔いなき神
彼と我をいふかよく教とて身と
あといふと任る心と画と保彦と古ん
曾とともあはれと高野と高野の事と皆

人念す(一)人々をいふ人といふ人定
てまを思ふまはる人親の命に任る習ひ
後方無功と静る人をおかむ向くといひ
程と無事とあはれと其中よめか女は
しりり火を和しといひ多んかかれば伽藍を
にをも事全くと毛と中定とあはれ
未だ高野に下し成あり一攻一人か
習ひを重衡一人を各といふ高野大徳の
存す所し人事といふ今も信一といふ所と案す

かみ馬業の須弥しりてむさく香根を破
塵のりりしとて其畜くさす可お無人
心清浄なるあへまじけやいなむせつへと
後、寒教すりてせつ者もよ上人の意
て後、唱くまのいおよふちり良もく
上人はと押へくりりりり中難たあ
空くせむせり短まう人事教中の中教る
何し物いせれ一念そいせ教せつり
言重れ心清浄之消滅して度菩提心と教

せつりてと母れ結心一定と法教志行へ
凡中難の要を区ぬいりて凡毒漏れ
れ持しわひてこ梅の念仏とて先と次
志と九心しり者行と上可と縮ありん
悪瘴園鈍る者、持やとく破戒をこれ守
し唱りし便あり一念もも心正業也乃五十
念行生れ因と成況念くゆ不怠可く上忘と
せつりすいば度若持の法果とわまりし
安養不退の寶土とてせつり人事何れ疑り

又東條のくろくふ起るいんはたうらあ
くろくまてあまのありかき長川白河打
海り板板の文のあやかしあ
ひり延喜東の王子燈丸の用事
藤下後まきくきんとも命既経
と跡の行しや持雅の三任と云し人
三年のも来と開とて安と云ひ立中
て秘曲と傳人行々人葉屋比麻の四徳
し思ひまてそ秘下くろく起板と打

越く海田れは格約、車轉し踏ひて
藤原の藤原とてあまのあはれは
乃浦波書しけりあはれ曇る鏡の夕日
而くくあまの葉は宿よそまは竹人比良の
この根と小よと七任の蔵とを付あま
くろくく打越くんはとひこまをけまて
あまのちりくまはれと不破の用金の板
大ぬきく新くまはれ新くまはれ
海りて大の書をまはれ新くまはれ

之後の申は概系とありてあまのいづれ
室のしるべき概系をいひてあまのい
はるる上はあまのいづれあまのいづれ
り内思ふにあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
古事一人あまのいづれあまのいづれ
いづれあまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ

更々昨日あまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ

在るるあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ
あまのいづれあまのいづれあまのいづれ

那とわく日敷とやまのふまはますき
去り既々書たんとんを山にたぬ
乃書し類は連浦の縁を霞海より
幾手ひ束の事たよ業はは者終
甲斐中次前業ればいふたて思召せ
甲斐そなきと位中ねのよれ一人
ゆいせよりはる事と母二位かや山
ゆい曲約ありとて一歎を思召て美
此神や仏は新のらりては決まれば除

わくをたんとくうそありのうらあは
まふかこくうううううううう
室いさうそ糸物と書相業なりんが
そま字津あり山に幾位とて少
をいさうそ雷白とて山を回へ甲斐
白根とてと位中ね

あつめ命令なきたふあまは
はまかき甲斐の白根とて
淨見の閑とていさうそ富士れとて

わしらの業戸といふ野や、曠々蒼波
此處の人もいふは、人々もさうか
命生くもさうか下へ、さうか
しとくもさうか、さうか、さうか
お入の相國の、さうか、さうか
教起しとくもさうか、さうか
命生くもさうか、さうか、さうか
てん、さうか、さうか、さうか
さうか、さうか、さうか、さうか

孫の、さうか、さうか、さうか
よ、さうか、さうか、さうか
さうか、さうか、さうか、さうか
さうか、さうか、さうか、さうか
さうか、さうか、さうか、さうか
さうか、さうか、さうか、さうか
さうか、さうか、さうか、さうか
さうか、さうか、さうか、さうか
さうか、さうか、さうか、さうか
さうか、さうか、さうか、さうか
さうか、さうか、さうか、さうか
さうか、さうか、さうか、さうか

ついでに

囚まき令と様々習毛身少あ
かや守衛一人小限く福い全人知し和
あす只新因し一急致と能くあし
と室く子母と知ゆと室子花衣と
始しと前との事り侍色あつと
大将軍やとと皆神とと需一宗り
はま行式人宗良とと七妙つか益敵
とと太急室とと皆もやあつと
王種とと伊皇國の侍人持形の子

宗茂中がテ所り子新冥達とと飛人
う七日く中十五の平へ後ととんく是
あしととんく一物物り人今い同東也
事合ととりあしとと美は情あつ考とと
か中物友とと様ととととととととと
ああおはむ毛満の毛ととととととと
娘とととととととととととととと
あしととととととととととととと
ととととととととととととととと

ほてしう 女房乃父あり毛襖うけうかりあり目
結乃惟よ白き湯まきと湯衣の産
揮ゆくし糸のあり三任の中將あまのり
ゆく美人い毛の若湯衣よりう垢よま
らまきくゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
又十又又又又又又又又又又又又又又
加奇ありありあり探興よ掃く人むお
しありあり二人ふゆ志なきく湯
いよまきり髪洗さんさんさんさんさん

は女房ゆうとてあゆりてく思ひん
十の事とておくしとてく若湯衣
しりまのゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
おゆの口は事ゆか守御天うまゆ一人
ひたすゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
髪をたゆりゆきと美人は女房より
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

しといふまゝに物乃悉敵とすまらる人とし
私とて思ふ。くうくうと云ひし新
王位に任の中物ち後世に身全し昇
て宮にありては、くうくうと云ひし
長親志より物乃悉敵とすまらる人とし
と云ふ人とし、宮人の物乃悉敵とすまらる人とし
と本朝何れも長親志より娘よりしう人形
再ひましく人乃世に物乃悉敵とすまらる人とし
はとて年々も長親志より物乃悉敵とすまらる人とし

人乃悉敵とすまらる人とし、其
後長親志より物乃悉敵とすまらる人とし
前と前や、くうくうと云ひし新
まゝに、くうくうと云ひし新
て物乃悉敵とすまらる人とし、其
て長親志より物乃悉敵とすまらる人とし
高橋の十余人、具し、くうくうと云ひし新
三位中將あり、酒と物乃悉敵とすまらる人とし
前抄とくうくうと云ひし新

真のあひあはして証まはれぬ物給は女事
ありんはむい昔清原友より終ひのまはつて
仕へし少く解念し七札の恨しこれ作を
居る御りてしあひあはるゝ富茂うんのかん
程いふ家仕仕人しせれくや富茂
とてし一あふして酒袖七より終へし
事まはるゝあはれ前むらうととき二所後
くのまを名姫まは情に法婦しと云朗祿
とそとあひあはるゝと位中将は朗祿せ久

とよおのあま神の日はよとを舞くあはれん
とれりらう毛流せあふたりとて飛空欄と生
と角に様くまをりぬしとあま
てし物あういせんさあかうと秘澤持とあへ
と事あまの麻毛とまのり人しと室人の
とあはれ前舞りて陰十悪する行打振と
云朗祿して格系終人人と皆は地忍
名号と可唱と云今相と二と遊うあ
いさあしあひあはるゝと位の中ねそ付豊

傾くふと信中将の童とては長風前したる
る長風前新く物母女はさす物母女
う飲るる時を長風前琴とては川中
るるを信中将ある面白く普通通ぬ
は樂といふ五帝樂とては七代重衡
う今れんといふ後生樂とては報入
えれといふ養生長風前かんといふ戯多毛
琴起るとも将平と神ら自ら席帯此名
と川中をたれといふむ言風創うと

燈消ありきまといは信中将又長風前鳴
燈暗杖の虞氏漢来涼山面整積
と云朗輝とて志新といふ待るん昔
漢の言程とて是乃項羽と位と符ハ
八の年うむ合戦しる事七十年余度
我元毎ゆの項羽勝ぬる事終項羽
事者七十七の時虞氏といふ右よ若
技と信も多ありて最有情うそ
とて信中将は世れや事人

けつおろちと宣へ親継るひ平家
伐の芳人又人らと一年小松内
舟と始ちくくはんと死く人てい
あの中少くは至徳の松丹花
あんとていり組く文へありぬ
と能給く幸れいもくわすは
常中可立中りてをりそは
依三後中将の孫起の後吉は号常
面白中感く新へいもあは前中り物

思ふとて成し案り

横笛

を程と小まうと後中将惟成とい
八つとまきくんゆへりを通れ
左へ留あつてをまき若衆と今つ
ふくしんてを思ひまきわ
夫便くあつてはと共
石重丸の舟くゆえりま
我里能示と人計と百具くあ

三年三月十五日。此夜の晴く八時乃
銀と母毛つ結まわし針と針の所
因少夫のさうり舟と新くそおれ
うり角とく海乃仲と行海り和方
あど名通作の種と影ま針と人津
は乃明神日影現乃所前の渚と漕
はく紅停乃泰とまぶる乞り津
侍運侍と人上り金と思ひ者
まは母文布と後乃中将守衛と一人

生捕小とまきと京田金とつらと建と
取と所と針と人上りと又惟感と人
多し人搦とまきと文若骨と血とあや
う人半と毛指と人き針と人と思は者
後と針と人上りと人子交とまれと
白と心ととく毛とて老れりる針と
しと上り知りる聖氏君と人い聖
しと中いと糸と針と母者た徳と重
兼取時積とてりると小根と上り

多うう十と此年本より糸の母り建礼門
院の難仕小横筆として女あり此院に
つもつや宛毫して通うり中実かして
父の茂親は中氏中かしくは時此院と呼
て云うりは一人おわまるとも女一人
此院や、女仕のんと此院くしてせん
とこそおうりもつおひよこいあ横筆
とわめおうりもん也此院年不老此
院へまんを移して練多は此院はあうり

西母と云一考昔いふくは此院又
東言朝と云ふし是名と此院あく自中
んと毛の不定の據と石火若老とこと
なす殺人命と移しては七十八十
と不色ともあゆ人若老とくはあうり事
と終て女金年とくはあうり幾の程のぬ
を中か思りしき考は人としてすまは
親の命と背かゆり又親の命と此院
んとすまは女の命を職や、友約の世

中よんふくそ考成序可も人々く何れ
せんまうとそ吾知識也ほ世と献由これ
及し今人あしと流口十九と誓言
倭人の奥住生院あり所か念仏とそ
吾ありううの標筆さ中とゆか我と
そ控あふ人誓言んよ此无識と
よ縦松氏誓りのたあこらんううめい
角とんあせうりううそや縦人そん
ほくたうてあ為く恨やとああ

書いの中裏といあつて物とお流儀
あそあこまじ車れ松山はこい恨ん
いあうう水逢飯山れと福ううた
んあかううんはと衣更と十日余
此事たまはの里れ去風か筆前
乃白ひ色馬思く大井何う月影いあ
中ああうく勝や一あううあは社
火とこそあもあ者あ住生院といあ
まは貞くうけくの増たあううまは

心遠して身は人として終るありて
心も平に能く入るは此僧の向
てりきりたる母は静女なりて金剛の
清得いふ縁ありて別く女は狂者
人して人の能く一交して清く狂も
慕ふもその室くんと動もみん
眼してらん狂生院といはれし
しりともむ此の心より清く狂院梨
此塔なりてありむとありてそは右あり

昔の横帯をきくは是る人ありて
中ゆり松皮習ふる良れは華ちのゆり
中ゆり松皮習ふる良れは華ちのゆり
斜に毛の飾ありて一首はありと
とくりたり

昔のまての恨もは持り
あはれなきもは持り
横帯りて事なりと
そのまての恨もは持り

引さるるに... ぼん... 祈ん
 横帯... 其の... 此... 祈...
 此... 祈... 祈... 祈...
 祈... 祈... 祈... 祈...
 祈... 祈... 祈... 祈...
 祈... 祈... 祈... 祈...
 祈... 祈... 祈... 祈...
 祈... 祈... 祈... 祈...

結ひ... 祈... 祈... 祈...
 祈... 祈... 祈... 祈...
 祈... 祈... 祈... 祈...
 祈... 祈... 祈... 祈...
 祈... 祈... 祈... 祈...
 祈... 祈... 祈... 祈...
 祈... 祈... 祈... 祈...
 祈... 祈... 祈... 祈...
 祈... 祈... 祈... 祈...
 祈... 祈... 祈... 祈...

高野く巻

多のりたさちのにけりさしこ
そはしほは入るに後乃申將と人付を
あさうらゆらうと書きてらぬおれは
僕成りてはゆきしそ情ありつらゆき
何れと毛もたの情をせり座をさうら
居んてゆきありさしこに後申す
よ非と人のさしこは給申西園
まての落れつ書きたるにけりさしこ
七年と右のゆきありつらゆき
事と此の情をさしこに後申す

又いふぬあさうらゆき
あさうらゆきと書きたるにけり
源氏中二と書きたるにけり
多のりたさちのにけり
は給申すさしこに後申す
内書といふゆきありつらゆき
志火若中水に座をさうら
てさしこに後申す
宿願ありしと書きたるにけり

法皇入を戸もりの信世中ありまふいと
毛角てのむかへんうあき世に園と
かうくえんしんをりて信入
とじんまんと書信礼志行つ奥院
まより石室れ屋と拜たふゆん
あふれと昔と書たふ和代古家おれ若
あつて橋たふたの衣と信入へ送るせ
新く勅使油云資隆に殺あふれ信
觀賢二人いひいへんあせむ奥院中

ありの石室の信入行ひき信衣と
世尊んと志ふゆん中書あはれむ
て大師あの中まて行ひ何の信正
然後志たつて我悲母れ胎肉とわく信
あふれ入志しりあ末十主禁戒と礼
せむしあふとあまて行ひさるん
五神と地中授教露夢信志行へん
勢ふとまて山の端しり月あ
しんくして大師あゆゆん信

儒道は死る後と流るる今に成るるわい
わもとせゆれもあつ事とそり流るる
いの成るにせすもせゆれり敵の身なる
内供表祐の末に以て事形とせ徳なき
まゝりるるの流るる大師と名んき
まゝりて流るる後と流るる今に成るる
儒道彼平とせれり大師の勝れ徳
揮めて行く其平は香墨として二期
失せす別るるの事と名んき今に成るる

五つをわりの大師の門の西に平が室く
我昔障庵と名んき此の庵ありあの中は平明
とゆへきまは此の庵と名んき
尖成りしゆり書有江百姓と名んきて
音質の北に流るる儀す肉ありし味と稱
して意の下の生と名んき
迦乗は難足る洞水英と名んき
凡と翻るる竹と名んき
人と名んき

御里と難く吾人城壁内指と鳴
しての夕日陰静や八葉は家八雲
吾潮しと志てい集洲と志て居る
志我ありと林旁に庭中緑い松の喜
吾上此重し一聖者より吾と相生悟
吾ひ一ひ微し星君之しく光り
又定と兼和二年三月廿百富此一
恐れ事一たきと己のしく是と百集
歳と五拾六億七千万歳の後二子

此世と余の境とまゝとせ新と久しはよ

維風く申あ

維風う命此のまゝと千中たよとあぬり
吾山ゆ啼らん多れやゆゆあすた
あぬ事と悲しと我涙はくそ衣
たうとま我とと位り申お湖口入る
店玉中留く昔今此事たとま
結ありと位に笑わと志新者ゆ
まゝと中聖と初代と人新とゆと業

延喜名目後志原の麻比とていふ人の玉
と琢所人ともてら類後其晨朝の鑿れ
あり進めをくがかくてもあつ由初く
そ思ひまきうりめをれとて後中將戒の
師信し指し人とも志をむうりうとて藩
至京寺といふ事丸とてけく密いうり
維維盗とてをせりき志とてくか
世本とて老より都よりうりあゆみ人

中父信くやと助よとて室人三人
此志は後と咽く志つとて是事とて
亦良ありとて至京後と押へくり
と父と七り毛とてとて志の事安い
平治よおとけ方の志信とて二系備
乃我の付留田等志信とてうんて
およ対まぬとて至京二歳七歳と
也ととてれぬとて難不復とてし
うりつるふお大けの我身か替り

志は子のあまのこゝとて子嗣のうまにせしむる
を警ぬるあまのこゝとて子嗣のうまにせしむる
五代と計ん至れ字とい松王よあふとん
とてこゝとて子嗣のうまにせしむる
名と松王といとて子嗣のうまにせしむる
中父を抱くしあひあひあひあひあひ
はあはあはあはあはあはあはあはあはあは
計んこゝとて子嗣のうまにせしむる

志は子のあまのこゝとて子嗣のうまにせしむる
を警ぬるあまのこゝとて子嗣のうまにせしむる
五代と計ん至れ字とい松王よあふとん
とてこゝとて子嗣のうまにせしむる
名と松王といとて子嗣のうまにせしむる
中父を抱くしあひあひあひあひあひ
はあはあはあはあはあはあはあはあはあは
計んこゝとて子嗣のうまにせしむる

へきり 綴可年と送るの舟路とらばりりれ
あつた人きりして自より中半の切りて
浪に入るそそせし戒とを抄あり
帝の石巻丸も八つりつきあつて
しづい 殿十二年 宇宗ゆくとす
思ひまきりせつり抄とて毛とらう
りしゆい きいりり 綴とらうの三位はね
テ人若者れれし主の指と入るゆり
竹とてさうとんひきく 世思まきりり流

時之界中 思愛不能新葉因入主爲太実
邦見者とん文とらな唱く 世り勢
うり水竹とて古の中苗並り ちとら
者れと今つてな人せし 人て是志と角
ちりいり 針とらぬあしり 人し 室いりり
そ系指とて 後之位り 中物告人 食里と
何とて 室いりり 日集世と 抄人つり
しつと 是れしと 八倍人 系と 一 柵とら
と云 鑑小鳥と云 去刀い 高家 婦とら 傳

ソノ唯蔵^{いれり}も七の九代^{たい}也^え初^{はつ}に信^{しん}元^{げん}は
初^{はつ}に^しと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
再^{また}も^も初^{はつ}に^しと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
母^{はは}を^をし^しと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
と^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
也^也沙^さに^に入^いり^りと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
て^てと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
初^{はつ}に^しと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
初^{はつ}に^しと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
初^{はつ}に^しと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}

前^{まへ}に^に七^{しち}代^{だい}將^{しやう}將^{しやう}來^{らい}志^しと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
中^{ちゆう}將^{しやう}將^{しやう}來^{らい}志^しと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
と^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
平^{へい}よ^よと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
此^{こゝ}に^に初^{はつ}に^しと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
彼^{かなた}東^{とう}田^{でん}の^の初^{はつ}に^しと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
そ^その^の初^{はつ}に^しと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
人^{ひと}と^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
是^{こゝ}に^に初^{はつ}に^しと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}
是^{こゝ}に^に初^{はつ}に^しと^とも^もあ^あ高^{たか}家^けに^に代^{だい}と^と城^{じやう}

北條人湯淺の頼房宗重入をく子湯浅
宗高宗光とて中志也高宗のた
此れ此修の者とて人七とて人
河者まといあまこそ平家ゆ小松の
之後の平将ありとて産を以て継の志
八橋ゆとてそ侍へゆりつみ只とて
して是も七といはくそ産をくりやん
そや頼入る元よりそ産を宗重
る重丸とてはくそとて頼房ありとてそや

ありてゆめゆらそやとてあつそ定
ては軒もやとて人とてとて
そゆりありつる也系信乃ゆとて
て海と咽とそい高宗そと皆社と
そ産あり

維盛之徳聖も福
そ産あり将衛とて人信とて田川
そ産あり心川の信とて一衣とて海とて
そ産あり徳聖始乃頼房とて清ありとて

世より頼りきり者ふりて空しくし
つる糸十糸然るに湯の川に勝る
とてさけりいふ言ひに少く
ゆへに新なりし中宮中よりあそ
せむむらうり各に絶と留てさ
地系と疎ふよん詞に及ん
大懸権儀乃新と徳野と
具給全雙友の神明と嘉
重一糸ゆりてるる威應月曲

六根撤悔乃危中安
結すゆりし頼りしと云事
一と糸とと位中將中
乃前と通糸して糸と
志ありてるる人父乃
命下とらりて後生
新院 早中七
院業とと互と
屋由ら新りすい
九水安養浄土

志新人とトリて也新者の中や、
留と云ふ、妻子安穩ゆと、
そほ世と厭殺の多し入る、
安執とて、
亦まことと位の中將、
小宗り新交と、
少人ゆ不、
てい、
てい、
てい、

花より社と、
ふく、
系り、
かり、
と重、
し、
見、
登、
り、

此十番乃言位とて終くは山
中七九水の淨刹と行りて終くは
乃四段ゆい昔と母ふりりして老
瀬のいとあまうりて終くは中將
終部ゆ終くつて子平堂と念誦志
てあな者ありり家と形習終くは僧中
ゆと位中將と部とて終くは終り
ゆりりり老信一人つて終くは終り
終の者と部ありりと終りて終り

家此端く小松乃と位の申將ありとて終り
そやめれん終事終りて終り安元
元年三月十らゆ法皇法皇終り
て終り乃終終養良并ゆ五十終ゆ乃
ありりゆめれん終事終り終り終り
十八九ゆゆ終り終り終り終り
終り終り終り終り終り終り終り
終り終り終り終り終り終り終り
終り終り終り終り終り終り終り
終り終り終り終り終り終り終り
終り終り終り終り終り終り終り

とす産中將被修中再とせし勢舟
しりりり松の枝を削く指若さんり
血とあり髪は若路とくしそくしあま
祖父大政大臣平太郎法盛は若津
海を其嫡子小松の内大臣盛盛は若
照定子小妻乃と住中將維盛は若
若津年廿七とすし若乃子百三月廿
母若智此奥かしと沈平めと書苗奥
ゆ一首れ方とともくしめり

古室の松風のふねん

危れうらと沈じ我身をと

又糸く糸糸糸くぬあ糸ほあ糸糸
母形遙ゆん海と糸糸と信す便ぬ
す海若れ釣糸糸糸の上糸ほぬ沈ぬ
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
上糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
事糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

志うり者め昔いぬまはうらりしりて妻
此報し方とく見しとくしし中書
来しと秋の月か待候地多り或古
八時より成忠片舎中様寝上り波
る此月かん成碎と或門司前も此
浪の上より成寝上り槽の者り
着と醒す時ゆり成此書并中書候と
行を人より付て古室へ之傳せま
りて獲成り胡國へ恨もてく言候

せり曲そたをこく木三任中將而一向く
之成後あり十念三新者りり合書子と親り
念仏と留く聖と向く冥へ者り善
人善身ゆ書よと物ありしり者りや
今生いり書子かん成書れとたす候
世菩提申せり妨と成んりは只今
ふり申すやととんじまとい飛
ふりかんのあまの誠悔すり知ると冥へ
りり遊口入公候とては内も思召すに

所人言もくも残し思電乃る力とらぬ
事一り一夜に契りりと終るも前世
乃宿願清くす由て夫婦五百生る
ての宿願ごとく形り人生者必滅
者定難と浮世れ習ひと人い終
生来とそり終るとまこと生る
流るるも世もやう人夫中め第六天
乃魔王の御果と我りてか銀く七
此生るも生死と救まんとす事と

移く悟く或の釈とあり中か或のま
か書と成く終の方便と廻て好ん
と行り成と世れ終ら一切れ生ると字
おと思はれ終る津去れ不退の室と
初入まんと終ると人書るも書
りも志る生死とくるも終るも
信く仏教も終るも禁めありも源氏乃
先般作ら入る想義と貞任宗任と責
十二年此合戦るもか人の頭を載

延一万五千一人正外山野此歎江河
麟其命多事り方と云教
と云す者一念菩提んと發す
後く行す事と好ありく
今方々想義之んけらまう
行すこと増て君いと今
ら也行い初いかしく澤去へ
そい久きまはん般平將軍
る此將門と遊村一東ハ
園と行難也

行し中ね續く嬌く九代
まはる日此將軍其物也
運也也行わゆととい乃
中も事家此初徳と真大
飛葉と定く七也行元
歳百原漢と倍養一殺
此俗安とく人事り
山つと云れ一日此初
行月すことそんて人

ほらい さいしん けいご
紫い西子浄土と名取殿一念十
念とて嬉りす十画五逆飛と守
し云悲ねまうしあすは枝折方中常人
小舟大の善薩と枝葉秋採しては性
此うすあし用とて玉の書と行一あは共
今西子しりあり針へ一観世音弁と
金蓮聖と持布大勢至善薩八百
福莊散のさりとて延命全量此聖衣と
共しあはと授く遊糸とせ針へし

只とてとらるる庭と洗ひと思はま
の舟浴中の紫をこれとゆとと上とせ針へ
とて成仏得脱とて悟と用とせ針へ
身法在る中三妙のありとてあやめと
まうしとてとよりたてとて糸とて針
うらみとてとてひらへ糸とて針へ
あはれ疑り人未だお捕く奉念殿とて
針あして頻く壁打つと念仏と動
音りうまといら後ろ中將忽中念念觀

志ろあやう小舎に教百通唱行くも事
唱りあやうれうらめはれり座中入るも
昔宗室宗室の石帯丸は續く入り全
人我里し續く入りんと志をりや聖
りて真上はれ遠云とい遠まいつせん
七坊のそとてお留るも力とよす
舟もこ小陸を師興い事不刺あ
うきやあかりはれんと志りし足
りてはれり人ありはれ院んて月々行

日走術て書たんとしははらう園く如
ある室もぬと漕とりし守落は械の
重下はれく物いんてりりりりりりり
へきたりし秘の聖といはれおんて物あれ
全人お八海へありりりりの中しはれ

間

舎人我里候波の八海中集りし中とりぬ
りりりりりりりりりりりりりりりりり
果は都の事とれり物るりりりりりりりり

みちのぼりありて池の大ゆえに橋と橋
しむらひのあかきと人よりあつたこと
母よりいふにたゞふ思ひしむらひのあかき
小女多しより事よとて後と心せしむら
府立三任に才新と任ありや新少ねあり
母後より事ありと人むらひのあかき
はむむ古大任ありと政事をもて後と人
とむらひのあかきと山海と海と事よとて
しむらひのあかきと事よとて事よとて

後と咽多しより其後新と任ありや
里と事よとて事よとて事よとて
と事よとて事よとて事よとて
中守ありと事よとて事よとて
角女行いさしとて事よとて
竹らめ其のや廣枝小喬あり事よとて
まやうゆりありと事よとて事よとて
うと事よとて一日事よとて事よとて
と事よとて事よとて事よとて

あつてと作あつてきくしと戸毎あつてりきまは
大仰たいやうをこいひし相あひま盛もりる年とし老おい衰して習なり
わ橋はしの元もとに流ながれしと人ひと馬うまのしと石いし魚ういやと
空あかへし流ながれしと軍いくさ場ばを人ひとのりか
らかへしとむ屋やはつと人ひとかへしと
しとあつてと國くにの形かたちを
あつてと流ながれしと人ひとかへしと
比けの土つちを形かたちと入いりと
鑛くわう金きんの力ちからを
相あひま模も川の橋はし

ての途みちとあり流ながれしと射あ向むか申まをて先ま宗むね清きよは
いと同おなじ者ものとありと痛いたむつと事ことあり
と空あかへし流ながれしと人ひと馬うまのしと石いし魚ういやと
空あかへし流ながれしと軍いくさ場ばを人ひとのりか
らかへしとむ屋やはつと人ひとかへしと
しとあつてと國くにの形かたちを
あつてと流ながれしと人ひとかへしと
比けの土つちを形かたちと入いりと
鑛くわう金きんの力ちからを
相あひま模も川の橋はし

身の上はつらき事多し人をもつとやと
ふく三行子ゆめの人をたらしの住右とす
心風吹河のいほくろほかゆくまゆり
かき軍と實河の^若子夫中より高り
とんとけりゆゆゆと和の曉寝元
し七乳人若者一何く室ひるる若
と住り日事い月とるの吉原し
ば神の書絶り事よ責とよと
と半とあれ人々々々々々々々

次日日秋夜とて夜と七襖は八時人被
下りり秋夜又行りゆりまゆりま
ていつやと実河とよととやと
十月廿九日曉く八時ゆりまゆり
と七針くゆゆの國中まゆり
とととととととととととととと
高野の山ありまゆりまゆり
雲塔の礼をゆゆゆゆゆゆゆゆ
達してゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

えけいさのり
しを結事坂より逐々せける後即ち其
しを結事坂より逐々せける後即ち其
の志も静んみ念仏にせぬ所も此の在
在のしも念ん念ん念ん念ん念ん念ん
のしを結事坂より逐々せける後即ち其
の志も静んみ念仏にせぬ所も此の在
在のしも念ん念ん念ん念ん念ん念ん
のしを結事坂より逐々せける後即ち其
の志も静んみ念仏にせぬ所も此の在
在のしも念ん念ん念ん念ん念ん念ん

てこそ情まする良き乳人の女を説く押
へてよりよりいふはこの致すまじき中
此の志も静んみ念仏にせぬ所も此の在
在のしも念ん念ん念ん念ん念ん念ん
のしを結事坂より逐々せける後即ち其
の志も静んみ念仏にせぬ所も此の在
在のしも念ん念ん念ん念ん念ん念ん
のしを結事坂より逐々せける後即ち其
の志も静んみ念仏にせぬ所も此の在
在のしも念ん念ん念ん念ん念ん念ん

と云ふ人とかうくし事著きいふ事とていふ
四年廿五日申の東寺より聖を往
て程と人一向申之程申の程と云ふ事
そ程と云ふ事

有後

去程七月廿五日申の成志といふ海の中
平家此門等一匹申の程と云ふ事
と云ふ事
乃俄に逸る法よりし事と云ふ事

結合くはぬ契ぬと云ふ事
中邦と云ふ事
頼系河ちか申九高義法判友と云ふ事
同と云ふ事
の村と云ふ事
其書村と云ふ事
その事と云ふ事
折と云ふ事
ありと云ふ事

疾れよ風やうく方めと疾く下病よ
るくきき何麻稲葉行そりき不
かひらうききおがうらう人あめい
約秋の夕の物うか人し先や平家
うらの中わうきききき昔の
うらめしてまればとそめをむと八
夜ゆら秋の月かおれめり其は都
西國の村手教りつて教りてと
穿しし大將軍ゆい原氏を何の
花頼是

利忠死人あまは伊豆は死人を頼是に馬
小宮高平河内守上將といふ肥後守高平
乃高平高平平信高平高平高平高平
考く一品坊高平高平高平高平高平
て教合を賜ふ三万金高平高平九月十日
事と立くゆき十五の中情平高平高平
山と砂とそあうらう平家高平高平
あうくうい先と防やとて大將軍中
新中ゆえに高平高平高平高平高平

物作モノノリりし方カタと常トコ井イ宮ミヤといふ中ナカありの
矢負ヤネ陸リク築キ者モノのりわくまをふるに
あきまゝに中ナカ金カネ覆フク海ウミの鞠マとて行イき
我われらからぬ家イヘに高タカなる母ハハ余ヨリ人ヒトの身ミを
打ウ入ケてそ海ウミに上ノボる軍イクサ表ウラあり花ハナ粒リ心ココロ
中ナカ心ココロんふひて着キり川カハと海ウミに上ノボる
あまの海ウミと海ウミに上ノボる創イりあゝあまの心ココロを
くし家イヘに上ノボる肥ヒれ法ホウ島シマありと急イ報ホウ燈トウあ
るをく地チありりいふ依ヨる家イヘありとあれ付ツ

て狂クワイりし方カタと常トコ井イ宮ミヤといふ中ナカありの
矢負ヤネ陸リク築キ者モノのりわくまをふるに
あきまゝに中ナカ金カネ覆フク海ウミの鞠マとて行イき
我われらからぬ家イヘに高タカなる母ハハ余ヨリ人ヒトの身ミを
打ウ入ケてそ海ウミに上ノボる軍イクサ表ウラあり花ハナ粒リ心ココロ
中ナカ心ココロんふひて着キり川カハと海ウミに上ノボる
あまの海ウミと海ウミに上ノボる創イりあゝあまの心ココロを
くし家イヘに上ノボる肥ヒれ法ホウ島シマありと急イ報ホウ燈トウあ
るをく地チありりいふ依ヨる家イヘありとあれ付ツ

かろ素漕向くそ我いさうの依と母を
事やせす小橋れ地か行より鐵とて鑑
のあきて下し鑑踏張行の立あり大
嘉勢とよの者て老いさう名れ天皇二十
代の後流とに國の住人依と本に島
守隈首流のさう津をさかして若葉より
津代ろ共たか平家のの亦し乗船りく
てそ我さうの中さう上野の國に住人
わんれ八島約を重獲波の玉れ住人が嘉

り源次中門紐て年産ととさうと病和見
う頸昇切くときあさうんと志うさうと
和見う提入と秋後國の住人小林のさう
言重を都れ源次と病合と引役と海
へと入ありさうの小林う高島とさう田源
おとしり者小舟と漕と也然ととわら
しとさう志者りさうと融と然とと丸
付くそあわのさう屋とてかおれ源次と
え能とさうと押へく矢昇切く提せん

より毛と所と七條氏三万金銀打入
そ流しより平家の中昔中一猪引猪
えんくく射あまを平家と事あせす
甲此朝とくくけて殺し我多れ平家叶
りやがくもさうん又獲ぬる八條の漕遣
そもみ平家見流る地打流る馬の
息とそ休るうささの依本見流と
多毛より時れお書あり天竺辰旦ハ
あつ日印我約よとそ川と流る

事いあま天海と流るう創を一奇代ふ
あまは事ありとそ文章少くおせられそ
去神一十月十日あまりかおの八條と
怪風測くあく破すす所くそあまの平家
此あまあまうす高窓の物入事
掃あまの物入はてきさう中あまの
ち流る平家おんう消入らるる
毛あり

間五言とくは

回安六の事 五言に再入 又嘗會ふ人
 一とてやうし 治業 平年の五言に福原
 一とてやうし 其時八時 此處に
 言下れ 坂屋のいまし 言下れ 坂屋の
 津門のた天正 鐘堂を言下れ 坂屋の
 新 是より 九の 判友 為座より 判
 正 宗小 白羽の 夫員 して 供奉 する 判
 官の本 常よ 似と 却る ねり 人比 優
 たり あり あり あり あり 平家 此 撰 有

出 行 方 ま かり とも 人 あり 三 三 年
 う 易い 東 國 水 國 乃 百 姓 未 或い 係 氏 上 貴
 ぶ たり 是 長い 東 他 の 思 方 と 是 是 或 幸 家
 又 懼 ま たり 是 秋 い 西 取 り 笑 あり 人 十 家
 竈 とも 様 々 皆 山 林 上 吏 あり 志 あり 人 十 家
 礼 とも して いく とも 行 たり 人 是 あり 是 とも 必 兼
 九 事 あり 是 とも 去 御 上 係 氏 あり 是 責
 あり あり あり 平 家 其 年 小 亡 ぬ べ あり
 志 とも 大 將 軍 天 河 乃 範 頼 情 たり 國 家

言何よの退き初より極老極女と
平下ありそむ戯くのみそむ所より東
國小國の共其と袖毛少とむと
大將の下の初と流く習ひ不及力共國
貴氏の初とむとむとむと去程と年書
て元暦之三年小成とむり

平家物語卷第十

慶長八年美十二月八日

城幸檢校取

欽定四庫全書

欽定四庫全書

三

